



ベストティーチャーに聴く 授業の工夫⑦

鹿児島大学 FD 委員会

【発行 / 2022年12月】

教育学部
准教授 片岡 美華



私が担当している授業は、特別支援教育に関する科目です。障害のある子どもたちを理解し、どのように指導すればよいかについて、法制度、教育課程、指導・支援の考え方、指導方法など多方面から扱い、特別支援学校や特別支援学級で働く教員を養成しています。できるだけ具体的に理解できるように以下の工夫をしています。

1 具体事例や視聴覚教材によりイメージを持ちやすくする

履修する学生には、これまでに障害のある子どもに接したことがある者、ない者がいます。「自閉症」ということばを知っていても、具体的にどういう子どもなのか、その状態を適切に理解しているとは限りません。また「自閉症」は現在、自閉スペクトラム症として様々な特性のある人たちを総称して呼んでいます。そのため、具体像を知っていてもそれはごく一部に過ぎないということがあります。こうしたことから「この障害のある子はこういう子だよ。こんな子もいるよ。あんな子もいるよ」「授業で伝えた用語について実際に子どもを通して見るとこういう状態だ

よ」など、事例や視聴覚教材を用いて伝えることで少しでも具体的にイメージできるようにしています。そうして多くの臨床像を知っておくことで、障害の早期発見や対応に結び付けることができます。この知識は教員として、またインクルーシブ社会の一員としても重要だと思っています。



2 理論と実践を結びつける

「特別支援教育」は、高校までの教科にはありません。そのためほとんどの学生は大学に来て初めて障害児教育学や障害児教育方法学という学問に出会います。多様な子どもに対応するためにも、特定のケースにしか当てはまらないことなく、普遍的な概念や基本知識を与えることを第一にしています。そのうえで、その知識を活用して実践に生かせるように事例を挙げて考えさせたり、理論で学んだ子ども像を実際に演じてみて五感を通して学びを深めさせたりしています。教育学部では、1年次から実習があり、実習科目も体系化されています。これを系統的に学ぶ「理論」と往還させることで、理論で伝えたことを実際に見てみよう、という段階から、現場を見て疑問に思った

ことをこの授業を通して解決しよう、という段階に進み、やがては自分で授業を組み立て子どものニーズに応じた指導が考えられ、実践できるようにしていきます。4年次には、教育という領域に留まらず、福祉や法律など複合的に考察し、障害者問題を自分事として捉え、そのために自分には何ができるかを考える演習に発展させていきます。



3 ユニバーサルデザインの理論を知り体感する

インクルーシブ社会においては、障害だけでなく言語や文化の違い、貧困、ジェンダーなど多様な背景をもつ人々が暮らしています。その社会で未来を生きる子どもたちを育てるには、教員自身も多様性を理解し、柔軟な姿勢が求められると思っています。このことは、私自身のオーストラリアでの留学経験とも重なっています。そこで、多様性に応じるユニバーサルデザイン教育の理論を伝え、将来、学生が授業で活用できるようにしています。しかしそれだけでは、いつどのように活用すればよいかや、何が効果的か実感しにくいので、私自身の授業にもユニバーサルデザインを取り入れています。例えば、スライドと丁寧な(見返して重要点が理解できる程度)レジュメ、言葉での説明と図表や映像の活用、指導案作成・読解と模擬授業、

発表、話し合いなど複数の活動や多様な評価の導入、というように様々なタイプの学生が学びやすいように工夫し、体感してもらうことで学びを深めています。

私自身、「授業は楽しい方がいい」、とっていてそれを授業でも伝えていきます。「楽しさ」の感じ方は人によって異なると思いますが、興味がわく、関心が広がる、学びが楽しい!と思えるよう私自身が楽しんで授業をするようにしています。



21号

22号

23号

24号

25号

26号

27号

28号

29号

30号

ベストティーチャーに聴く授業の工夫⑦

大学院理工学研究科(理学系)
教授 宮本 旬子



1 はじめに

理学部の「植物形態学」「植物系統学」と理工学研究科の「Advanced Phylogenetic Botany」に加え、生物系オムニバス科目や教職関連科目を分担し、年200コマ前後に出講しています。鹿大赴任後に50科目の授業と70名の研究指導に関わる間、大学教員の業務は激変しました。誰でもあらゆる情報を入手できるデジタル時代の知の創出と伝承とは何か、模索する日々です。

2 わからん!

赴任後すぐに理学部生物学科で実験実習と講義の一部を分担しました。私は教育実習で中高教諭には向かないと自覚し、研究継続のために就職した不良助手です。先端的研究例を説明すると院生に「わからん」と一蹴され、大学時代の教職科目のノートを見ると「授業は既存知識7割と新奇情報3割にて組み立てよ」というメモが目にとまり、鹿大の入試問題を既存知識と仮定して授業を組み立てることにしました。年に1回あるかないかですが、教室内の全受講生が専門的な話にのめり込む瞬間があり、これが講義の醍醐味かと納得しました。

3 つまらん!

理学部改組により地球環境科学科の助教授になり「植物系統学」を開講しました。野生植物の基礎研究は金儲けとは無縁で、マスメディアで「ひまダネ」と呼ばれる分野です。私の師は「儲からない分野を自ら選んだ」と豪語し、市場経済と直結しないほうが自然現象に取り組む環境を得やすいと私も考えていましたが、バブルの申し子には通用しません。ゆとり教育と入試多様化で学力や興味の差が拡大し、「タメになった」と書かれたミニッツペーパーの裏には「つまらん」の4文字。また、学習障害がある学生への対応に苦慮し、放送大学に編入学し教育学を学ぶことにしました。『教育の社会史』(辻本編著 2008)、『転換期の教師』(油布編著 2008)、『授業研究と談話分析』(秋田編著 2008)は初等中等教育に関する教科書でしたが、試験重視 vs 出席重視、学問歴 vs 学校歴、知識獲得 vs 知識獲得方法の獲得など、その後の学生の傾向を理解する上で役立ちました。

参考図書: 秋田喜代美編著 2008『授業研究と談話分析』放送大学教育振興会、有本章編著 2008『変貌する日本の大学教授職』玉川大学出版部、河合栄治郎 1955『学生に与う』社会思想社、辻本雅史編著 2008『教育の社会史』放送大学教育振興会、油布佐和子編著 2008『転換期の教師』放送大学教育振興会、H.コリンズ・R.エバンズ著、奥田太郎監訳、和田慈・清水右郷訳 2020『専門知を再考する』名古屋大学出版会。



4 めんどくさい!

助教授になって研究指導が可能になり、知財セミナーで学んだ Laboratory Notebook と海外での経験に基づく Lab-meeting を取り入れ、野外調査から遺伝学的実験までを一連の流れとして指導しようと思いました。鹿大の教育内容では物足りずに吹き飛ばれていく学生や、話すように書く日本人学生よりも文法的に正しい日本語を駆使する留学生など、優秀な学生と出会い鍛えられました。しかし、調査や実験など「めんどくさい」作業を断固やらない学生や剽窃や捏造を不正と思わない学生がじわじわと増え、教授昇任後は個々の学生の興味の優先度や将来展望を考慮した研究課題設定に変えました。自由度が増した反面、学生は自分の短所を直視せざるをえず、私は教育と研究を分離せざるをえず、学問的生産性が低下する結果となりました。

5 そして、パンデミック!

『変貌する日本の大学教授職』(有本編著 2008)の予測は概ね的中したようですが、遠隔授業の主流化は想定外でした。指定 URL に繋いで出席したことにし、適当にレポートを書いて単位取得するのかと思いきや、真面目に授業を聴く学生が意外に多い。そこで、基礎知識を伝えた上で、技術情報や研究上の話題を Tips として提供し、学生自身が将来も使えるミニテキストや用語集になる積み上げ式の課題によって評価することにしました。チャットでは教室では無口な学生の発言を拾え、大学院授業の和文と英文教科書の音読や対話では LL 教室的な効果も得られるようです。『専門知を再考する』(コリンズ・エバンズ 2020)にあるように特定分野の専門的な知識や技術の創出と伝播の在り方はこれからも変化していくでしょう。しかし私は大学入学時に読んだ『学生に与う』(河合 1955)にある「真をもって理想とし、真が人格の要素をなす」という極めて古めかしい学問の存在意義は廃れていないと考えます。この機会に、残る任期に何ができるかよく考えたいと思います。